

仕事と育児の両立で得た体験を活かし

# 安心感や信頼につなげて 故郷に恩返しをしたい

**災害時、通常業務に欠かせない  
放射線に関連する  
資機材の管理を一手に担う**

中部電力浜岡原子力発電所の構内には、数力所に及ぶ「緊急機材保管庫」が設置されている。各保管庫には放射性物質が付着しているかどうかを確認する測定器や放射線のレベルを測定する機器をはじめ、防護服などの防護装備品が整然と保管されている。緊急時あるいは防災訓練の際に使うものだ。これらを管理・運営するのはプラント運営部放射線管理課線量管理グループ。入社17年目を迎えた山田起永子は、2014年7月から、その中心的役割を担っている。

「いざという時、資機材を速やか

に取り出して使えるようにしておくのが私たちの務め。品質が維持されているか、劣化・破損していないか、有効期限切れのものはないかといったことを細かくチェックしていきます」

また、緊急機材の管理とは別に、日常、放射線管理区域内で使用する約100種類に及ぶ資機材を不足することなく調達・補充するのも山田の役目だ。

**育児を通じて円滑な人間関係、  
段取りの重要性を痛感**

山田は地元・浜岡で生まれ育った。「私が生まれた頃に営業運転を開始した浜岡原子力発電所は、常に身近で自然な存在でした。子どものころは、一般に開放されている浜岡原



浜岡原子力発電所  
プラント運営部放射線管理課

日常的に使用する資機材の調達・管理や放射線計測器の点検に使用するRI（放射性同位元素）の管理。その他、放射線管理区域内で使用する作業服や手袋などの防護装備管理や放射線業務従事者への教育などを担当している。

子力館やその横の遊具や芝生広場がある『協力の森』でよく遊んでいました。自転車をこいで電気をつけるといった実験装置やアトラクションが面白くて、勉強のためというより、遊び感覚で来ていました」

大学進学後は、理学部で化学を専攻。「そのうち、身近にあった原子力発電をより深く理解したい、地域に貢献できる仕事に就きたいと思うようになり、中部電力を就職先に選びました」という。

放射線という「目に見えなくて恐ろしい」とか、「出産に影響はないのか」と心配する人もいるが、山田にそうした不安はまったくなかった。「放射線は五感では分からないので不安に思う人は多いかもしれない。だからこそ、常にさまざまな機

器を使って測定したり監視すれば安心できる」という考えがいつも根底にある。

入社後は、発電所内にある原子力研修センターで半年間の研修を受け、発電部に配属された。最初の1年間は、女性で初めて運転員として当直・交替勤務を経験する。

プライベートでは、結婚し、二人の子どもにも恵まれた。育児休職を経験して、親たちの協力も得ながら、復帰後は時間短縮勤務制度を利用して仕事と育児を両立させた。長女が小学校1年生を終えたのを機にフルタイム勤務に戻り、14年7月からは資機材管理やRI（放射性同位元素）の管理を任されている。

多岐にわたる細かな業務をテキパキと手早くこなす山田は、周囲から



山田起永子(やまだ・きえこ)

中部電力・浜岡原子力発電所プラント運営部放射線管理課勤務。静岡県御前崎市生まれ、大学の理学部で化学を専攻。1999年入社後、発電部運転員、技術部放射線安全課(現プラント運営部放射線管理課)線量管理グループで個人が受ける放射線量を管理する担当を経て、現在、同グループで資機材管理、RI(放射性同位元素)管理を担当。二児の母。

## Voice of the spot

(上)敷地内の第2資材庫には、日常、放射線業務に携わる者が放射線管理区域内で使用する約100種類に及ぶ膨大な資機材が保管されている。防護服や全面マスク、長靴のほか、ポリ袋、帯電防止剤、ゴム長手袋、帽子、洗剤など多岐にわたる。

(下)山田は資機材の搬入などの際に必要となるフォークリフトの講習を受講のうえ修了証を14年に取得。自分でできる活動範囲を広げている。



の人望も厚い。  
「限られた勤務時間の中で、自分は発電所や職場のために何ができるか考えました。効率よく業務を遂行するために、前日までに翌日の仕事をシミュレーションして段取りを整えたり、自分が急に休んでも誰かが代わりにできるように常に情報を共

有しています。また、個人だけでなく、グループで成果を出せるよう、他の担当者と協力して、さらにスムーズに業務を進めることができました」と語る山田は、業務の改善に留まらず、働きやすい職場の風土づくりに貢献している。



周囲の協力を得ながら、限られた時間の中で成果をあげている。チームワークと段取りの良い働き方は、同僚にもいい刺激を与えている。

## 原子力の理解を得るため 自分の言葉で気持ちを伝えたい

地域行事にも親子でできるだけ参加し、PTAの役員も引き受けた。

「以前は、好き嫌いがはっきりしていて、嫌いなことに関しては入り口で心を閉ざしてしまう時もありました。しかし、思い通りにならぬ育児経験を通じて、いろんな価値観を大らかに認める心の余裕が生まれました。何気ない会話や一見無駄に感じるようなことでも、安心感につながったり、ネットワークづくりに役立ったりすることがありますね」

11年東日本大震災が起きたのは、次女の出産で育児休職中の時だった。震災直後から、不安を募らせる近所の奥さんが山田のもとに詰めかけた。「何が起ったの?」「今はどういう状況なの?」といった質問を受け、原子力発電所で働く者として、できるだけみなさんの不安を和らげられるよう、できる限り丁寧に答えた。

それまでは、友人、知人とも原子力について話すことはほとんどなかったが、震災後はそうした機会が増えた。「子どもと原子力関連のニュ

ースを見た時、『これはこういうことなんだよ』と説明することがあります。子どもに分かるようにするには、平易でシンプルな表現にしたり、例え話をしたり、工夫をします。また、何度も粘り強く繰り返し伝える『忍耐力』もいるので、すごく骨が折れますが、伝える訓練にもなりま すね」と母のやさしい眼差しで笑う。

中部電力では、お客さまのご意見を傾聴するとともに、浜岡原子力発電所の取り組みなどを知ってもらうために、お客さま宅への「訪問対話活動」を行っているが、こうした経験が活かしている。「自分の考えを押し付けるのではなく、相手の話をよく聴くことの大切さは、子育てから学びました」と話す。

「技術的なことを説明するだけでは、納得していただけないこともあります。やはり、信頼関係が大切ですね。女性が原子力発電所で働いているということに、お客さまが驚かれることがあります。『ふつう』に生活し、出産したことを知ると安心されます。言葉で語るだけでなく、存在や『人となり』も安心感や信頼につながるのではとも思います」

入社当初から「原子力発電所の近



復帰後は、時短勤務制度を利用して二女の育児と仕事を両立(現在はフルタイム勤務)。

くで生まれ育ち、故郷に恩返しをしたいという想いで働いていることを、お客さまにも伝えていきたい」と考えていた。最近、その気持ちがより一層強くなってきた。

好きな言葉は、「You are unlimited(あなたの可能性は無限大)。「これからも、自分や相手の無限の可能性を信じて、お互いの想いを伝えたり聴いたりする場をつくっていききたいですね」と笑顔で語る。

文・構成／丸上直基 撮影／秦英夫